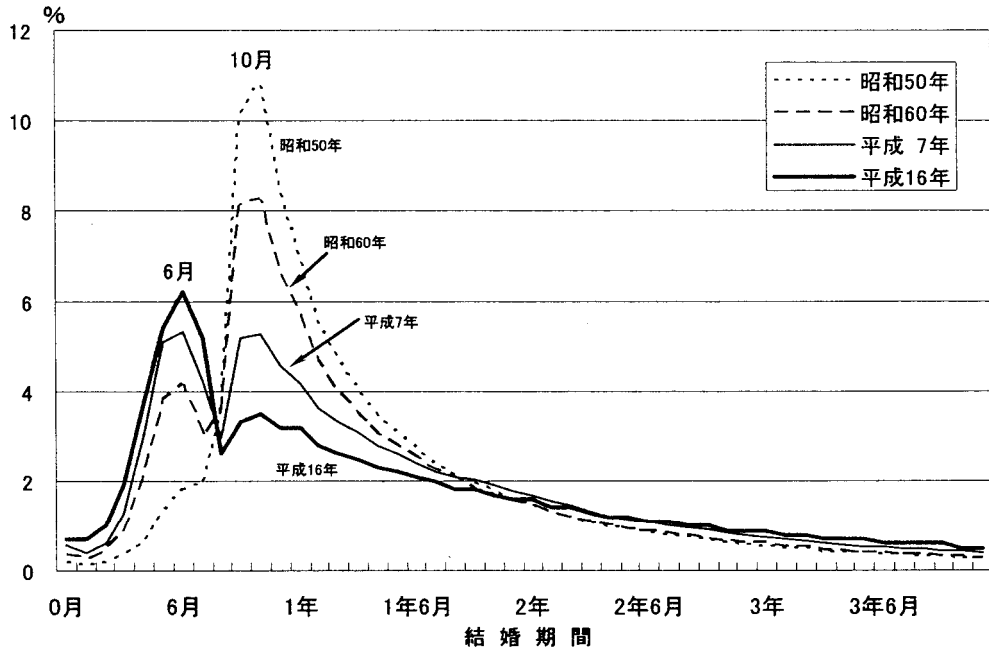


3 出生動向の多面的分析

(1) 父母の結婚期間からみた出生

第1子出生までの結婚期間別の出生割合をみると、昭和50年は結婚9か月に急増し10か月をピークに減少している。昭和60年以降では6か月と10か月に山がみられる。ただし、形状は変化してきており、昭和60年は10か月が最高なのに対し、平成7年は同じ割合になり、平成16年には6か月が最高となっている。(図13)

図13 第1子出生までの結婚期間別にみた出生構成割合 —昭和50・60・平成7・16年—



- 注：1) 嫡出第1子についての数値である。
 2) 結婚期間不詳を除いた総数に対する構成割合である。
 3) 0月とは生まれた月と同居を始めた月が同じ場合である。

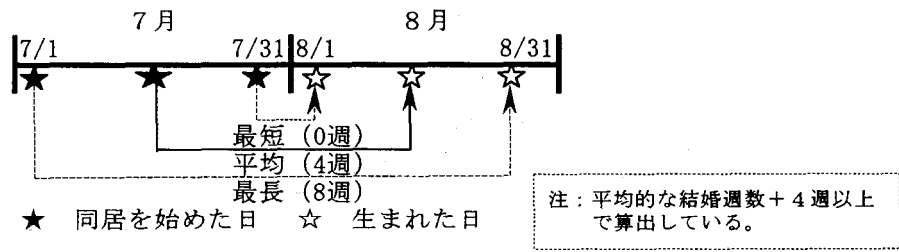
(2) 結婚期間が妊娠期間より短い出生の傾向

近年の出生状況を見ると、第1子出生までの父母の結婚期間は6か月がピークとなっている。そこで、嫡出第1子について結婚期間が妊娠期間より短い出生を考察してみる。

ここでは、結婚期間が妊娠期間より短い出生について、以下の《仮定》に基づいて算出した。

《仮定》 結婚期間が妊娠期間より短い出生の考え方

- この報告書では、
 - ① 妊娠週数の数え方から、月経周期が28日周期の場合で、排卵時点で既に妊娠2週目にあたること
 - ② 婚姻の届出や同居の開始がハネムーン後になるケースもあることを考慮して、
「結婚週数 < 妊娠週数 - 3週」 (= 「妊娠週数 ≥ 結婚週数 + 4週」) で出生した場合を結婚期間が妊娠期間より短い出生と考えることとした。
- ただし、結婚期間は、人口動態統計出生票より「生まれた年月 - 同居を始めた年月」で算出しており、月単位でしか把握できないため、結婚期間(月数)に対応する実際の結婚週数には幅がある。
(例：結婚期間が1か月の場合、実際の結婚週数は、最短で0週、最長で8週、平均で4週となる。〈下図参照〉)

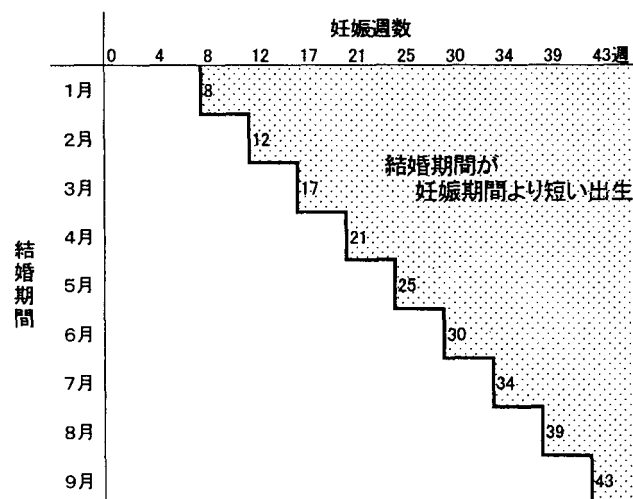


- 結婚期間が妊娠期間より短い出生数の試算においては、結婚期間に対する平均的な結婚週数に基づき算出した。(具体的には、下表の区分について算出)
ただし、上記のように実際の結婚週数には幅があることから、試算結果についてもその上下に一定の幅があることに留意する必要がある。

結婚期間が妊娠期間より短い出生に計上するケース(仮定)

結婚期間	妊娠週数
1月	8週以上
2月	12週
3月	17週
4月	21週
5月	25週
6月	30週
7月	34週
8月	39週
9月	43週

イメージ図



注：出生届における「同居を始めた年月」は、結婚式を挙げたとき、または、同居を始めたときのうち早い方を記入することとなっている。

前述の仮定に基づき試算した結婚期間が妊娠期間より短い出生数及びその嫡出第1子出生に占める割合をみると、昭和55年から平成14年にかけて年々増加していたが、それ以降は減少に転じている。平成16年の母の年齢階級構成で標準化して年次推移をみると、平成14年以降も増加傾向となっている。

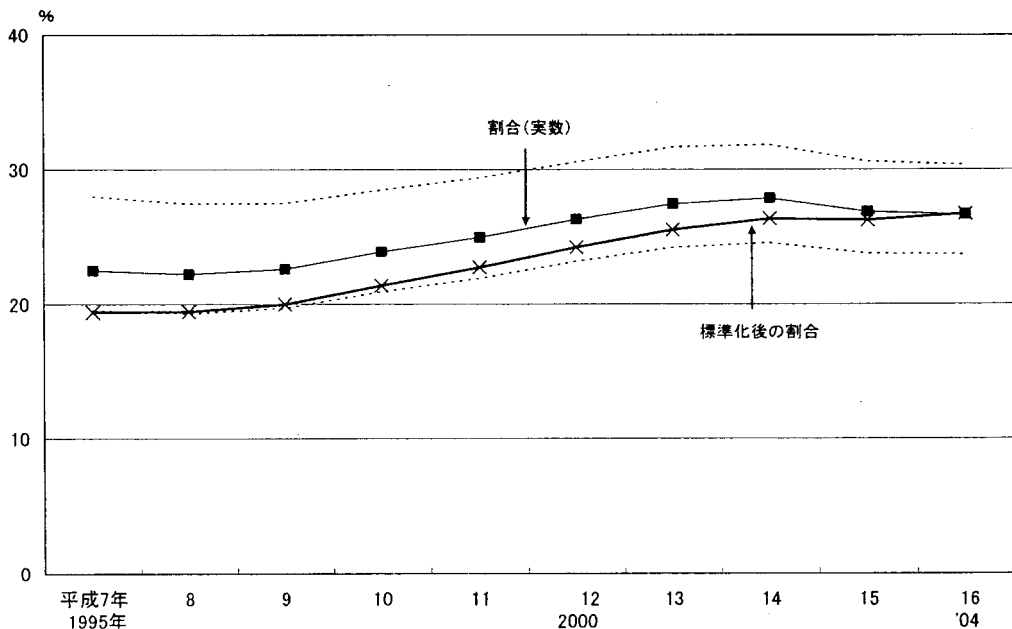
なお、この割合は結婚期間が妊娠期間より短い出生の嫡出第1子出生に占める割合であって、婚姻に占める割合ではないことに注意する必要がある。(表10・図14)

表10 結婚期間が妊娠期間より短い出生数及び嫡出第1子出生に占める割合
—昭和55～平成16年—

年次	嫡出第1子出生数 (千人)	結婚期間が妊娠期間より短い出生		
		出生数 (千人)	嫡出第1子出生に 占める割合 (%)	嫡出第1子出生に占め る標準化後の割合 (%)
昭和55年	660	83	12.6	10.6
60	593	103	17.3	14.2
平成2	522	109	21.0	17.6
7	557	125	22.5	19.4
8	563	125	22.2	19.5
9	559	126	22.6	20.0
10	571	136	23.9	21.4
11	565	141	25.0	22.7
12	569	150	26.3	24.2
13	559	154	27.5	25.6
14	555	155	27.9	26.4
15	531	143	26.9	26.3
16	522	139	26.7	26.7

注：1) 嫡出第1子出生数は、結婚期間不詳を除いた数値である。
2) 標準化後の割合は、平成16年の嫡出第1子を生んだ母の年齢階級構成で標準化したものである。

図14 結婚期間が妊娠期間より短い出生の嫡出第1子出生に占める割合 —平成7～16年—



注：1) 点線は結婚期間を月単位でしか把握できないことにより想定される幅である。
2) 標準化後の割合は、平成16年の嫡出第1子を生んだ母の年齢階級構成で標準化したものである。

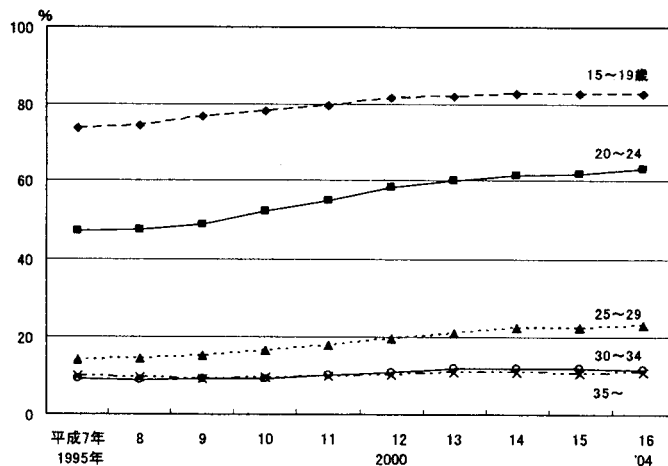
結婚期間が妊娠期間より短い出生の嫡出第1子出生に占める割合を母の年齢階級別にみると、昭和55年には「15～19歳」で5割、「20～24歳」で2割、25歳以降では1割に満たない割合であったが、平成16年には「15～19歳」で8割、「20～24歳」で6割、「25～29歳」で2割、30歳以降で1割となっている。概ね各年齢層で増加傾向にあるが、特に、年齢層が若くなるほど多くなっている。(表11・図15)

表11 母の年齢階級別にみた結婚期間が妊娠期間より短い出生数及び嫡出第1子出生に占める割合
—昭和55～平成16年—

年次	結婚期間が妊娠期間より短い出生数(千人)						嫡出第1子出生に占める割合(%)					
	総数	15～19歳	20～24	25～29	30～34	35～	総数	15～19歳	20～24	25～29	30～34	35～
昭和55年	83	6	45	26	5	1	12.6	47.4	20.1	7.8	7.1	6.6
60	103	9	56	30	6	2	17.3	61.5	31.2	9.8	8.3	8.8
平成2	109	10	57	33	8	2	21.0	67.0	41.5	12.4	9.3	9.4
7	125	10	65	38	10	3	22.5	73.9	47.0	14.2	9.2	10.0
8	125	9	63	40	10	3	22.2	74.6	47.3	14.5	8.9	9.6
9	126	10	62	41	11	3	22.6	77.0	48.7	15.0	9.1	9.2
10	136	11	65	45	12	3	23.9	78.3	52.3	16.6	9.3	9.7
11	141	11	65	48	14	3	25.0	79.8	55.1	17.9	10.2	10.1
12	150	12	67	52	15	4	26.3	81.7	58.3	19.6	10.9	10.3
13	154	13	66	53	17	4	27.5	82.3	60.2	21.1	11.9	10.9
14	155	13	65	54	18	5	27.9	82.7	61.5	22.4	12.1	11.0
15	143	12	59	49	19	5	26.9	82.7	61.9	22.2	11.9	10.6
16	139	11	57	47	19	5	26.7	82.9	63.3	22.9	11.7	10.9

注：割合は、結婚期間不詳を除いた嫡出第1子出生数に対する数値である。

図15 母の年齢階級別にみた結婚期間が妊娠期間より短い出生の嫡出第1子出生に占める割合
—平成7～16年—



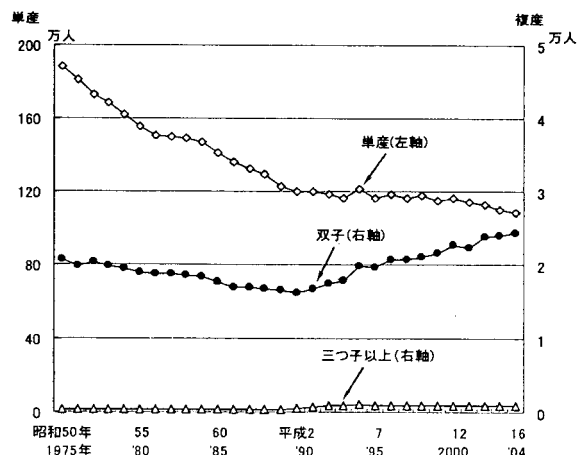
注：割合は、結婚期間不詳を除いた嫡出第1子出生数に対する数値である。

(3) 単産—複産の種類別にみた出生

単産—複産の種類別に出生数をみると、ほとんどは単産であるが、出生数の減少が続くなか、複産の増加傾向がみられ、平成16年は単産の出生が109万人、複産の出生が2.5万人となっている。これは、複産の大部分を占める双子の増加によるものである。(図16)

注：単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。また、複産とは双子・三つ子等多胎で生まれた出生であり、死産は含まない。

図16 単産—複産の種類別にみた出生数
—昭和50～平成16年—

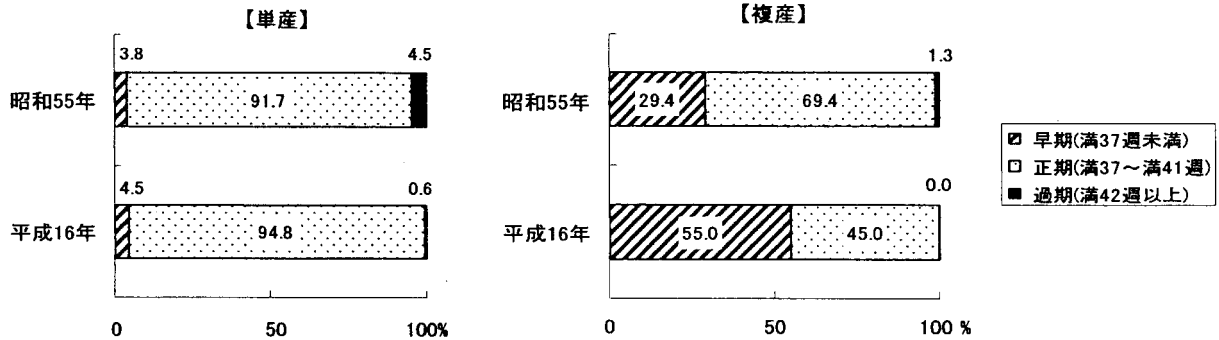


(4) 妊娠期間別にみた出生

妊娠期間（早期－正期－過期）別の出生構成割合を昭和55年と平成16年とで比較すると、単産はともに「正期」で9割以上を占めている。昭和55年には「過期」が4.5%あったが、平成16年には0.6%に減少している。

複産の場合、昭和55年は「早期」が3割、「正期」が7割であったが、平成16年には「早期」が「正期」を上回り、「早期」の割合が大幅に増加した。(図17)

図17 妊娠期間（早期－正期－過期）別出生構成割合 ー昭和55・平成16年ー



注：1)割合は、妊娠期間不詳を除いた総数に対する数値である。

2)単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。また、複産とは双子・三つ子等多胎で生まれた出生であり、死産は含まない。

(5) 出生時の体重

出生時の体重を単産－複産別にみると、単産の平均体重は、昭和50年には3.20kgであったが年々少なくなり、平成16年は3.03kgと0.17kg少なくなっている。また、複産も同様に、昭和50年の2.43kgから、平成16年には2.21kgと0.22kg少なくなっている。

出生時の体重が2.5kg未満の割合をみると、単産では昭和50年には4.6%であったが、年々増加し平成16年には8.0%となっている。複産の2.5kg未満の出生は多く、昭和50年は半数を占めていたが、平成16年には7割を占めるに至った。

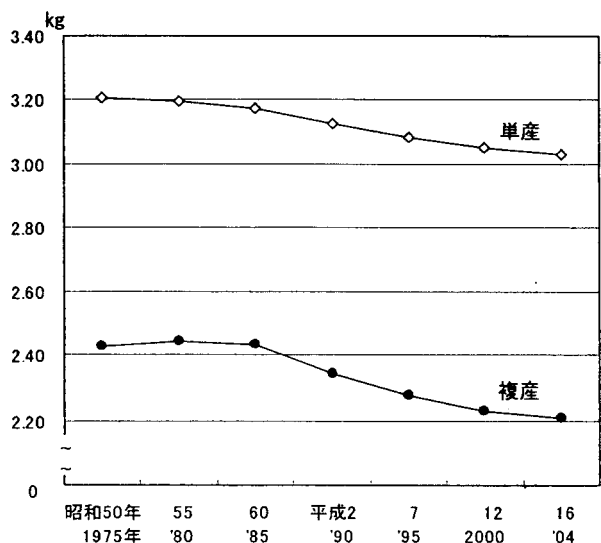
1.5kg未満、1.0kg未満の割合も単産・複産ともに増加している。(表12・図18)

表12 出生時の平均体重及び体重別出生数及び出生構成割合 ー昭和50～平成16年ー

年次	平均体重(kg)	総数	数			割合(%)		
			2.5kg未満	1.5kg未満	1.0kg未満	2.5kg未満	1.5kg未満	1.0kg未満
単産								
昭和50年	3.20	1 880 507	85 986	5 317	877	4.6	0.3	0.0
55	3.20	1 557 694	71 830	5 089	1 290	4.6	0.3	0.1
60	3.17	1 413 629	69 051	5 831	1 868	4.9	0.4	0.1
平成2	3.13	1 204 855	67 654	5 293	1 853	5.6	0.4	0.2
7	3.08	1 166 596	75 982	5 627	2 042	6.5	0.5	0.2
8	3.08	1 185 052	76 931	5 414	1 981	6.5	0.5	0.2
9	3.07	1 170 040	79 499	5 372	2 044	6.8	0.5	0.2
10	3.06	1 181 098	82 586	5 787	2 213	7.0	0.5	0.2
11	3.05	1 155 131	83 465	5 802	2 233	7.2	0.5	0.2
12	3.05	1 166 926	86 522	5 803	2 169	7.4	0.5	0.2
13	3.04	1 147 496	86 598	5 955	2 382	7.5	0.5	0.2
14	3.04	1 129 250	86 934	6 053	2 421	7.7	0.5	0.2
15	3.04	1 098 800	84 674	6 192	2 565	7.7	0.6	0.2
16	3.03	1 085 564	86 671	6 218	2 546	8.0	0.6	0.2
複産								
昭和50年	2.43	20 933	10 981	1 004	163	52.5	4.8	0.8
55	2.45	19 195	9 829	883	200	51.2	4.6	1.0
60	2.44	17 948	9 123	968	286	50.8	5.4	1.6
平成2	2.34	16 730	9 678	1 225	438	57.8	7.3	2.6
7	2.28	20 468	13 130	1 686	568	64.1	8.2	2.8
8	2.28	21 503	13 951	1 743	553	64.9	8.1	2.6
9	2.26	21 625	14 338	1 737	612	66.3	8.0	2.8
10	2.25	22 049	15 026	1 835	624	68.1	8.3	2.8
11	2.23	22 538	15 698	1 953	643	69.7	8.7	2.9
12	2.23	23 621	16 366	2 097	697	69.3	8.9	3.0
13	2.22	23 166	16 283	2 034	692	70.3	8.8	3.0
14	2.22	24 605	17 380	2 149	703	70.6	8.7	2.9
15	2.22	24 810	17 646	2 198	770	71.1	8.9	3.1
16	2.21	25 157	18 161	2 249	795	72.2	8.9	3.2

注：1)構成割合は出生時の平均体重不詳を含んだ総数に対する数値である。
2)単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。また、複産とは双子・三つ子等多胎で生まれた出生であり、死産は含まない。
3)平成2年までは100グラム単位で把握していたため出生子の出生時平均体重は算出平均値に0.05kgを加えた。

図18 単産－複産別出生時の平均体重 ー昭和50～平成16年ー



注：1)単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。また、複産とは双子・三つ子等多胎で生まれた出生であり、死産は含まない。
2)平成2年までは100グラム単位で把握していたため出生子の出生時平均体重は算出平均値に0.05kgを加えた。

母の年齢階級別に出生時の平均体重をみると、単産は「30～34歳」で多く、「15～19歳」、「40～44歳」で少なくなっており、母の年齢が低年齢層または高年齢層の階級で少なくなっている。複産では「15～19歳」が少なくなっている。

一方、昭和50年から平成16年にかけての変化をみると、単産・複産ともにどの年齢階級でも平均体重が少なくなっている。特に、「25～29歳」、「30～34歳」での減少が大きく、近年は年齢階級間の差が小さくなっている。(表13)

表13 母の年齢階級別出生時の平均体重 -昭和50～平成16年-

年次	単産							複産						
	総数	15～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	総数	15～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44
昭和50年	3.20	3.10	3.17	3.22	3.24	3.19	3.12	2.43	2.17	2.37	2.45	2.46	2.41	2.36
55	3.20	3.08	3.15	3.20	3.23	3.18	3.12	2.45	2.29	2.37	2.45	2.49	2.40	2.31
60	3.17	3.07	3.13	3.17	3.21	3.19	3.11	2.44	2.28	2.36	2.44	2.47	2.44	2.33
平成2	3.13	3.04	3.09	3.12	3.16	3.15	3.09	2.34	2.25	2.31	2.33	2.37	2.36	2.43
7	3.08	3.01	3.05	3.08	3.10	3.10	3.06	2.28	2.21	2.24	2.27	2.30	2.30	2.31
8	3.08	3.01	3.05	3.08	3.10	3.10	3.07	2.28	2.17	2.25	2.28	2.30	2.26	2.27
9	3.07	3.01	3.04	3.07	3.09	3.09	3.05	2.26	2.17	2.24	2.26	2.28	2.27	2.21
10	3.06	3.01	3.04	3.06	3.08	3.08	3.04	2.25	2.16	2.22	2.25	2.26	2.26	2.18
11	3.05	3.01	3.03	3.05	3.07	3.07	3.02	2.23	2.14	2.18	2.23	2.25	2.21	2.21
12	3.05	3.01	3.03	3.04	3.06	3.06	3.02	2.23	2.16	2.19	2.24	2.24	2.22	2.29
13	3.04	3.01	3.03	3.04	3.05	3.05	3.02	2.22	2.04	2.18	2.22	2.24	2.24	2.17
14	3.04	3.01	3.03	3.03	3.05	3.04	3.02	2.22	2.13	2.18	2.22	2.24	2.22	2.23
15	3.04	3.01	3.03	3.03	3.05	3.04	3.00	2.22	2.15	2.18	2.20	2.23	2.22	2.19
16	3.03	3.01	3.03	3.03	3.04	3.03	3.00	2.21	2.15	2.18	2.19	2.22	2.21	2.20

注：1)単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。また、複産とは双子・三つ子等多胎で生まれた出生であり、死産は含まない。

2)平成2年までは100グラム単位で把握していたため出生子の出生時平均体重は算出平均値に0.05kgを加えた。

単産について母の年齢階級別出生時の平均体重を出生順位別にみると、昭和50年、平成16年とも「15～19歳」以外では、第1子よりも第2子以上が多い。

また、平成16年の第1子と第2子以上の体重差を昭和50年と比較すると、「15～19歳」、「40～44歳」では大きくなっているが、それ以外の年齢階級では小さくなっている。(表14)

表14 出生順位別にみた単産の母の年齢階級別出生時の平均体重 -昭和50・平成16年-

年齢階級	昭和50年			平成16年		
	総数	第1子	第2子以上	総数	第1子	第2子以上
総数	3.20	3.15	3.25	3.03	3.00	3.06
15～19歳	3.10	3.10	3.09	3.01	3.01	2.99
20～24	3.17	3.15	3.22	3.03	3.02	3.04
25～29	3.22	3.15	3.26	3.03	3.00	3.06
30～34	3.24	3.12	3.26	3.04	2.99	3.07
35～39	3.19	3.07	3.22	3.03	2.96	3.07
40～44	3.12	3.04	3.15	3.00	2.92	3.04

注：1)単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。

2)昭和50年は100グラム単位で把握していたため出生子の出生時平均体重は算出平均値に0.05kgを加えた。

(6) 出生の場所・曜日・時間別にみた出生

平成16年の1日平均出生数をみると、出生の場所では病院、診療所の順で多くなっており、昭和50年と比較すると、助産所、自宅での出生数は大幅に少なくなっている(表15)。

曜日別に1日平均出生数をみると、昭和50年、平成16年とも土曜日や休日に比べて平日の出生数が多いが、平日の曜日には偏りはみられなかった(表16)。

平成16年の平均出生数を出生時間別にみると、平日は、9時以降徐々に上昇しながら、13時に急激に上昇して14時をピークに下降している。

土曜日は、平均出生数は少ないが平日と同じように推移しており、13時をピークに下降している。

休日は、10、11時が若干高くなっているが、1日を通じてほとんど変動がなく推移している。(表17・図19)

表17 出生時間別にみた平均出生数
—昭和50・平成16年—

出生時間	昭和50年			平成16年		
	平日	土曜日	休日	平日	土曜日	休日
総数	5 475.2	4 995.0	4 424.3	3 301.6	2 686.7	2 372.1
0時	179.9	175.3	169.0	93.1	91.8	87.4
1	179.0	175.6	173.7	96.8	95.7	93.1
2	184.4	174.7	172.5	100.6	97.4	94.9
3	192.1	179.6	181.2	103.3	98.0	96.5
4	192.1	184.7	184.2	104.2	102.1	99.2
5	197.8	190.1	190.2	104.7	100.8	100.9
6	200.3	190.8	195.9	103.5	101.9	98.7
7	212.7	208.8	207.6	108.3	108.8	103.6
8	217.9	214.6	213.9	116.6	115.6	108.7
9	235.2	231.2	216.4	142.3	112.4	111.3
10	270.7	272.4	233.9	149.1	125.4	119.7
11	297.7	293.8	234.1	162.4	133.2	118.8
12	276.9	276.4	201.7	174.3	142.8	113.6
13	307.1	274.3	196.9	263.5	166.4	108.9
14	345.3	273.3	195.0	266.8	164.6	107.5
15	332.7	256.7	189.6	219.5	141.0	105.0
16	299.0	232.6	177.6	193.6	131.2	100.5
17	247.4	201.5	167.8	163.7	118.6	98.9
18	208.4	175.0	153.6	139.2	106.8	91.7
19	187.5	163.8	149.6	115.6	93.3	85.0
20	179.8	159.1	149.6	101.9	86.7	82.3
21	176.9	160.0	151.0	93.8	81.6	81.1
22	176.3	166.0	156.0	90.1	83.5	79.2
23	178.2	164.8	163.2	92.0	84.4	83.4

- 注：1) 平日は月～金曜日、休日は日曜日、祝日、年末年始の平均出生数である。
 2) 昭和50年の平日は245日、土曜日は51日、休日は69日で算出した。
 3) 平成16年の平日は244日、土曜日は50日、休日は72日で算出した。
 4) 総数には出生時間不詳を含む。

表15 出生の場所別にみた1日平均出生数
—昭和50・平成16年—

出生場所	昭和50年	平成16年
総数	5 209.4	3 034.8
病院	2 470.6	1 571.4
診療所	2 303.4	1 426.2
助産所	375.0	30.8
自宅	46.8	5.4
その他	13.5	0.8

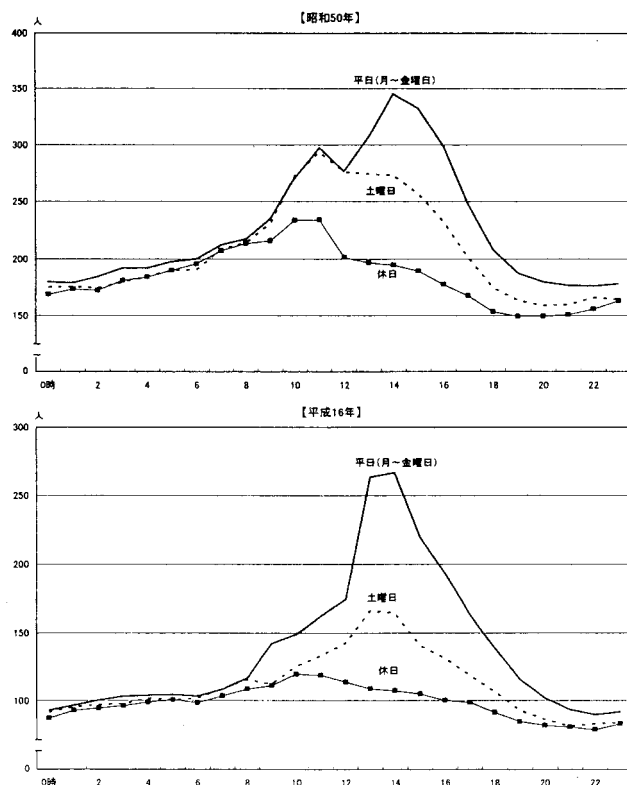
注：昭和50年は365日、平成16年は366日で算出した。

表16 出生曜日別にみた1日平均出生数
—昭和50・平成16年—

出生曜日	昭和50年	平成16年
総数	5 209.4	3 034.8
平日	5 475.2	3 301.6
月曜日	5 417.2	3 185.9
火曜日	5 575.9	3 456.6
水曜日	5 625.8	3 329.5
木曜日	5 275.8	3 219.9
金曜日	5 487.0	3 307.0
土曜日	4 995.0	2 686.7
休日	4 424.3	2 372.1

注：休日は日曜日、祝日、年末年始である。

図19 出生時間別にみた平均出生数
—昭和50・平成16年—



(7) (期間) 合計特殊出生率を用いた出生数の構造分析

(期間) 合計特殊出生率の2つの意味

(期間) 合計特殊出生率は、「その年次の15歳から49歳までの女子の年齢別出生率の合計」として算出されるものであるが、2つの意味がある。

- a 1人の女子が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当する。

これは、年齢別出生率が世代により変化しない場合には、実際に1人の女子が一生の間に生む子どもの数となるが、現在のように結婚・出産行動が世代により異なるときは、実際に1人の女子が一生の間に生む子どもの数は、コーホート合計特殊出生率でみる必要がある。

- b 「女子人口の年齢構成が15歳から49歳まで各年齢に1人ずついる」ものとして、その年次の年齢別出生率で生むとしたときの子どもの数に相当する。

女子人口の年齢構成を決め、年齢別出生率を用いてその標準化した年齢構成での出生数を算出しているため、年齢構成が異なる年次比較・地域間比較ができるようになっている。

① 出生数の分解

各年の出生数は、(期間) 合計特殊出生率を用いて、

$$\text{出生数} = 15\sim 49 \text{ 歳女子人口} \times \frac{\text{(期間) 合計特殊出生率}}{35} \times \text{(15\sim 49 歳女子人口の年齢構成の違い)}$$

と3つの要素に分解できる。「年齢構成の違い」は「実際の女子人口の年齢構成」と「どの年齢にも同数いるという標準化した女子人口の年齢構成」の違いを表す。なお、(期間) 合計特殊出生率は15歳から49歳までの35個の年齢別出生率を加えたものであるため、「15～49歳女子人口」を乗じて出生数となるよう35で除している。(「9 (期間) 合計特殊出生率を用いた出生数の要素分解について」参照)

② 年齢構成の違いの動向

ある年次について、「15～49歳女子人口」に「(期間) 合計特殊出生率/35」を乗じたものは、「その15～49歳女子人口について15～49歳のどの年齢にも同数の女子がおり、その年次の年齢別出生率で出生するとした場合に期待される子どもの数」(以下「期待子ども数」という。)に相当する。

したがって、「年齢構成の違い」が1を下回るときは、出生率の低い年齢に女子人口が偏った年齢構成になっており、実際の出生数は期待子ども数より少ないこととなる。

また、「年齢構成の違い」が1を上回るときは、出生率の高い年齢に女子人口が偏った年齢構成になっており、実際の出生数は期待子ども数より多いこととなる。

「年齢構成の違い」をみると、昭和56年までは1を上回り、実際の出生数は期待子ども数より多い。特に、昭和47～53年は1.1を上回っており、1割以上上昇効果があったこととなる。

昭和57～平成9年は1を下回り、実際の出生数は期待子ども数より少ない。特に、昭和63～平成3年は0.9を下回っており、1割以上低下効果があったこととなる。

平成10年からは1を上回り、実際の出生数は期待子ども数より多いが、最も大きい平成15年でも1.088で、昭和46～53年より低い。

③ 出生数の要素からみた出生数の動向

出生数の動向を出生数の3つの要素の動向（対前年増減率）からみると、昭和46～48年に出生数が約16万人増加しているが、「女子人口」は微増、「合計特殊出生率」は同程度で、「年齢構成の違い」が増加したことによるものである。

昭和49～50年に出生数が約19万人減少しているが、「女子人口」は微増であって、「年齢構成の違い」は増加しており、「合計特殊出生率」が急激に減少したことによるものである。

昭和51～平成2年に出生数が約68万人減少しているが、「女子人口」は微増であり、「合計特殊出生率」及び「年齢構成の違い」が減少したことによるものである。

平成2～8年に出生数が120万人程度で推移しているが、「女子人口」は微減であり、「合計特殊出生率」の減少を「年齢構成の違い」の増加で相殺したことによるものである。

平成9～15年に出生数が約8万人減少しているが、「合計特殊出生率」の減少を「年齢構成の違い」の増加で相殺しているものの、「女子人口」が平成9年から毎年1%程度減少したことによるものである。

平成16年に出生数が約1万人減少しているが、「合計特殊出生率」は横ばいであるものの、「女子人口」が引き続き1%程度減少し、「年齢構成の違い」が昭和51年以来28年ぶりに増加から減少に転じたことによるものである。（表18）

表18 合計特殊出生率を用いた出生数の構造分析 ー昭和45～平成16年ー

年次	実数				対前年増減率(%)			
	出生数 ①×②/35×③	15～49歳 女子人口 (千人) ①	合計特殊 出生率 ②	年齢構成 の違い ③	出生数	15～49歳 女子人口 (千人) ①	合計特殊 出生率 ②	年齢構成 の違い ③
昭和45年	1 934 239	29 400	2.13	1.079
46	2 000 973	29 589	2.16	1.097	3.5	0.6	1.1	1.7
47	2 038 682	29 700	2.14	1.122	1.9	0.4	△ 0.7	2.2
48	2 091 983	30 035	2.14	1.139	2.6	1.1	△ 0.1	1.6
49	2 029 989	30 128	2.05	1.151	△ 3.0	0.3	△ 4.3	1.1
50	1 901 440	30 251	1.91	1.152	△ 6.3	0.4	△ 6.8	0.1
51	1 832 617	30 271	1.85	1.144	△ 3.6	0.1	△ 3.0	△ 0.7
52	1 755 100	30 289	1.80	1.126	△ 4.2	0.1	△ 2.8	△ 1.6
53	1 708 643	30 319	1.79	1.101	△ 2.6	0.1	△ 0.5	△ 2.2
54	1 642 580	30 351	1.77	1.071	△ 3.9	0.1	△ 1.2	△ 2.8
55	1 576 889	30 438	1.75	1.038	△ 4.0	0.3	△ 1.3	△ 3.0
56	1 529 455	30 333	1.74	1.013	△ 3.0	△ 0.3	△ 0.3	△ 2.4
57	1 515 392	30 404	1.77	0.986	△ 0.9	0.2	1.6	△ 2.7
58	1 508 687	30 463	1.80	0.963	△ 0.4	0.2	1.7	△ 2.3
59	1 489 780	30 549	1.81	0.942	△ 1.3	0.3	0.6	△ 2.1
60	1 431 577	30 644	1.76	0.927	△ 3.9	0.3	△ 2.6	△ 1.6
61	1 382 946	30 726	1.72	0.914	△ 3.4	0.3	△ 2.3	△ 1.4
62	1 346 658	30 834	1.69	0.904	△ 2.6	0.4	△ 1.9	△ 1.1
63	1 314 006	30 983	1.66	0.896	△ 2.4	0.5	△ 2.0	△ 0.9
平成元	1 246 802	31 177	1.57	0.890	△ 5.1	0.6	△ 5.1	△ 0.6
2	1 221 585	31 154	1.54	0.890	△ 2.0	△ 0.1	△ 1.9	△ 0.1
3	1 223 245	31 094	1.53	0.897	0.1	△ 0.2	△ 0.5	0.9
4	1 208 989	30 974	1.50	0.910	△ 1.2	△ 0.4	△ 2.1	1.4
5	1 188 282	30 865	1.46	0.924	△ 1.7	△ 0.4	△ 2.9	1.6
6	1 238 328	30 681	1.50	0.942	4.2	△ 0.6	2.9	1.9
7	1 187 064	30 614	1.42	0.954	△ 4.1	△ 0.2	△ 5.2	1.3
8	1 206 555	30 651	1.43	0.967	1.6	0.1	0.2	1.3
9	1 191 665	30 249	1.39	0.993	△ 1.2	△ 1.3	△ 2.6	2.8
10	1 203 147	29 809	1.38	1.021	1.0	△ 1.5	△ 0.3	2.8
11	1 177 669	29 330	1.34	1.047	△ 2.1	△ 1.6	△ 3.0	2.6
12	1 190 547	28 821	1.36	1.064	1.1	△ 1.7	1.3	1.6
13	1 170 662	28 513	1.33	1.077	△ 1.7	△ 1.1	△ 1.9	1.3
14	1 153 855	28 240	1.32	1.085	△ 1.4	△ 1.0	△ 1.1	0.7
15	1 123 610	27 998	1.29	1.088	△ 2.6	△ 0.9	△ 2.1	0.4
16	1 110 721	27 773	1.29	1.086	△ 1.1	△ 0.8	△ 0.1	△ 0.2

注：対前年増減率(%)については、近似的に次の式が成り立つ。

$$\text{出生数} = 15\sim 49\text{歳女子人口} + \text{合計特殊出生率} + \text{年齢構成の違い}$$

(8) 嫡出子・嫡出でない子別にみた出生

出生数を嫡出子・嫡出でない子別にみると、減少傾向にある嫡出子に対し、嫡出でない子については、増加傾向にある。

また、出生に占める嫡出でない子の割合をみると、年々増加しており、平成 16 年は 2.0%となっている。(表 19)

表 19 嫡出子・嫡出でない子別にみた出生数及び出生構成割合 -昭和 50～平成 16 年-

年次	実 数			割 合 (%)		
	総 数	嫡出子	嫡出でない子	総 数	嫡出子	嫡出でない子
昭和 50 年	1 901 440	1 886 174	15 266	100.0	99.2	0.8
55	1 576 889	1 564 341	12 548	100.0	99.2	0.8
60	1 431 577	1 417 409	14 168	100.0	99.0	1.0
平成 2	1 221 585	1 208 546	13 039	100.0	98.9	1.1
7	1 187 064	1 172 346	14 718	100.0	98.8	1.2
8	1 206 555	1 191 102	15 453	100.0	98.7	1.3
9	1 191 665	1 175 006	16 659	100.0	98.6	1.4
10	1 203 147	1 185 943	17 204	100.0	98.6	1.4
11	1 177 669	1 159 389	18 280	100.0	98.4	1.6
12	1 190 547	1 171 111	19 436	100.0	98.4	1.6
13	1 170 662	1 150 293	20 369	100.0	98.3	1.7
14	1 153 855	1 132 224	21 631	100.0	98.1	1.9
15	1 123 610	1 101 976	21 634	100.0	98.1	1.9
16	1 110 721	1 088 565	22 156	100.0	98.0	2.0